

令和七年四月度 御報恩御講 『上野殿御返事』

(御書一四二八番 一行目～四行目)

【通釈】

願わくは、我が弟子ら、大願を起こしなさい。去年一昨年の疫病で死んだ人々の数に入らなかったとしても、蒙古の襲来からは免れるとは思えない。とにかく死は定まっていることである。その時の歎きは（法難を受けている）今と同じである。ならば、かりそめにも法華経のために命を捨てなさい。露を大海に入れ、塵を大地に埋めるようなものと思いなさい。

【主な語句の解説】

大願：大きな願い。仏道を実践する目的。

去年去々年のやくびよう：建治三（一二七七）年から弘安元（一二七八）年にかけて、疫病が日本国中に流行した。蒙古のせめ：元寇のこと。文永十一（一二七四）年に「文永の役」、弘安四年には「弘安の役」が起こっている。

つゆをうづむと思へ：総本山第六十七世日顕上人は「小さな露も大きな海に託せばその広大な徳に入る如く（中略）小さな塵も大地にうずまってその甚大な徳の一分となる如く、法華経の大海、大地に我らの小さい生死を入れて、大いなる仏の功德となることを思え」という意義」（大日蓮・平成十七年五月号）と指南されている。

【背景と大意】

本抄は、弘安二（一二七九）年十一月六日、日蓮大聖人御年五十八歳の時、身延から富士上野の地頭・南条時光に与えられたお手紙です。冒頭、「竜門の滝」の故事を引用し、仏道修行の難しさを説かれていることから、別名「竜門御書」とも称されています。御真蹟は大石寺に厳護され、御霊宝虫弘大法会において披露されています。

この年の九月、熱原法難が惹起し、本抄御述作のわずか二十一日前の十月十五日、神四郎・弥五郎・弥六郎の三人が改宗を迫る幕府役人の手により命を奪われました。他の多くの法華講衆も大変な迫害を受けましたが、彼等は励まし合い、一人として退転する者はいなかったのです。

大聖人は、入信間もない熱原の農民達が身命に及ぶ大難に遭いながらも、その信仰を貫く姿を機縁として、いよいよ下種仏法の究竟の法体を建立する時の到来を感じられ、出世の本懐として本門戒壇の大御本尊を御図顕されたのです。

この法難にあたって時光は、身命を賭して熱原法華講衆をかくまい、また日興上人等の僧侶の外護に努めました。追伸に、「此はあつわらの事のありがたさに申す御返事なり」（御書一四二八）とあるように、本抄は時光の多大な功績に感謝の意を表すために認められたものと拝せまします。さらに大聖人は、「上野賢人」（同右）との尊称を贈られるなど、当時まだ二十一歳の時光の人柄や篤い信心を称賛すると共に、一層の奮励を期待されています。

令和七年四月度 御報恩御講拝読御書

上野殿御返事

弘安二年十一月六日 五十八歳

願はくは我が弟子等、大願ををこせ。去年去々年のやくびやう

に死にし人々のかずにも入らず、又当時蒙古のせめにまぬかるべ

しともみへず。とにかくに死は一定なり。其の時のなげきはたうじ

のごとし。をなじくはかりにも法華經のゆへに命をすてよ。つゆ

を大海にあつらへ、ちりを大地にうづむとをもへ。